

長野県の埋蔵文化財情報誌



川原遺跡出土土偶

# 信州の遺跡

第23号

## 縄文時代特集

最新調査成果から①

えかがみがたしきいし

### 柄鏡形敷石建物跡を発見

長野市 吉田古屋敷遺跡

よしだふるやしき



長野盆地北部の浅川扇状地上に立地する吉田古屋敷遺跡の令和5(2023)年の調査で、縄文時代後期前葉の敷石建物跡が見つかった。

敷石建物跡は東西に2棟が並ぶ。西側のSB1は、円形の主体部に長方形の張出部が付く柄鏡形を呈し、全長約4.9mを測る。主体部の敷石は中央の石囲炉を囲んで扇形に配され、掘り込みの外周には縁石を巡らせる。張出部側には四角い無敷石の空間が2箇所あり、板材が敷かれていたと考えられる。張出部は全面に石が敷かれ、主体部との接続部に一對の立石がみられる。東側のSB2も柄鏡形を呈する。確認されたのは張出部のみであるが、長さが3mあり、SB1より規模が大きいと推定される。張出部の敷石は全面にあり、主軸中央に立石、先端部の円形区画内に埋甕がみられる。建物内の埋甕はこの時期としてたいへん珍しい。外周の敷石中から径12cmの大型石棒の破片が出土した。どちらの建物跡も柱穴が確認できず、上屋構造は不明である。



SB2 埋甕

敷石には凝灰岩と安山岩がおもに用いられている。浅川扇状地の堆積物として遺跡周辺で得られる石材であるが、大ぶりなものは浅川上流域で採取した可能性が高い。また、犀川の河原にある硬砂岩が所々で使われており、位置により石材を選択していた可能性もある。

今回見つかった敷石建物跡の遺存状態はきわめて良好で、いまだ不鮮明な浅川扇状地の縄文時代像の構築に向けて貴重な資料を得ることができた。

(長野市埋蔵文化財センター 清水竜太)



SB1



SB2



# 北東北との交流がしめされた縄文時代遺跡

飯田市 かわら川原遺跡

川原遺跡は、天竜川左岸の低段丘上に位置する。

調査は平成28(2016)年度と令和4～6(2022～2024)年度に行い、令和5・6年度は西側に隣接する平成28年度調査区から続く縄文時代後期を中心とした集落の調査を行った。

縄文時代の遺構には礫(川原石)が多く使われており、竪穴建物跡では外周壁面に礫を巡らせたものや廃絶後に土器や石器、剥片などと一緒に大小さまざまな礫を多く入れこんだものがある。遺物では石錘が多く出土しており、天竜川沿いで礫の入手が容易であることから礫を多用した遺跡の特徴がみられる。

礫を使用した遺構の中では配石遺構SH22が特筆される。長さ45～65cmの長方形の礫が直径約3.4mの半円形に立てて並べられ、その前面に30cm前後の円形の礫が置かれたものである。立てた礫の背面には30～50cmの礫が中央で2段、端の方では1段置かれており、これにより立てた礫を支えている。さらに礫と礫の間には、小型の礫のほか角礫や石器、剥片が詰められており丁寧に並べられている様子がみられる。立てた礫の中央とその西側には交互に、ほかとは異なる青色の礫が使われている。

また、壺形土器を埋納した埋設土器SK75は、壺形土器の胴部下半から底部までを埋めたものである。土器の内には胴部上半分の破片と別個体の破片を敷き詰め、その上に口縁部を乗せたもので、出土状況からは再葬土器棺墓の可能性も考えられる。使われている土器は器高45cmほどで口縁部に3つの把手を持った特徴的な形をしている。これは北東北の「十腰内式土器」に類似するもので、本来の十腰内式土器は把手が4つで沈線や磨消縄文などの文様があるのに対して、把手が3つと胴部に文様がないといった差異があるものの、北東北の影響を受けた土器の可能性はある。

飯田地域では現在のところ縄文時代後期集落の例が少ない中で、北東北との交流が示されたことは、当地域における縄文時代の他地域との関わりを考えるうえで重要な発見となった。

(遠藤恵実子)



SK75 埋設土器



配石遺構 SH22 (南から)

## 縄文時代の集落を丸ごと調査

辰野町 沢尻東原遺跡  
さわじりひがしばら

沢尻東原遺跡は辰野町を流れる天竜川の右岸河岸段丘面に位置する。発掘調査は令和元（2019）年に実施された。集落は東西120m、南北180m程の範囲に形成され面積は1.8haを測る。竪穴建物跡は50軒を数え、集落のほぼ全域を調査することが出来た。集落は<sup>むじなざわ</sup>貉沢式期～<sup>そり</sup>曾利Ⅱ式期までの間、9段階で変遷する。

成立期の第3段階の<sup>あらみち</sup>貉沢式期（新道式一部含む）では竪穴建物跡4軒だけであったが、以後集落は途切れることなく、第8段階の曾利Ⅰ式期で15軒と最盛期を迎える。しかし直後の第9段階の曾利Ⅱ式期で2軒と激減し終焉する。

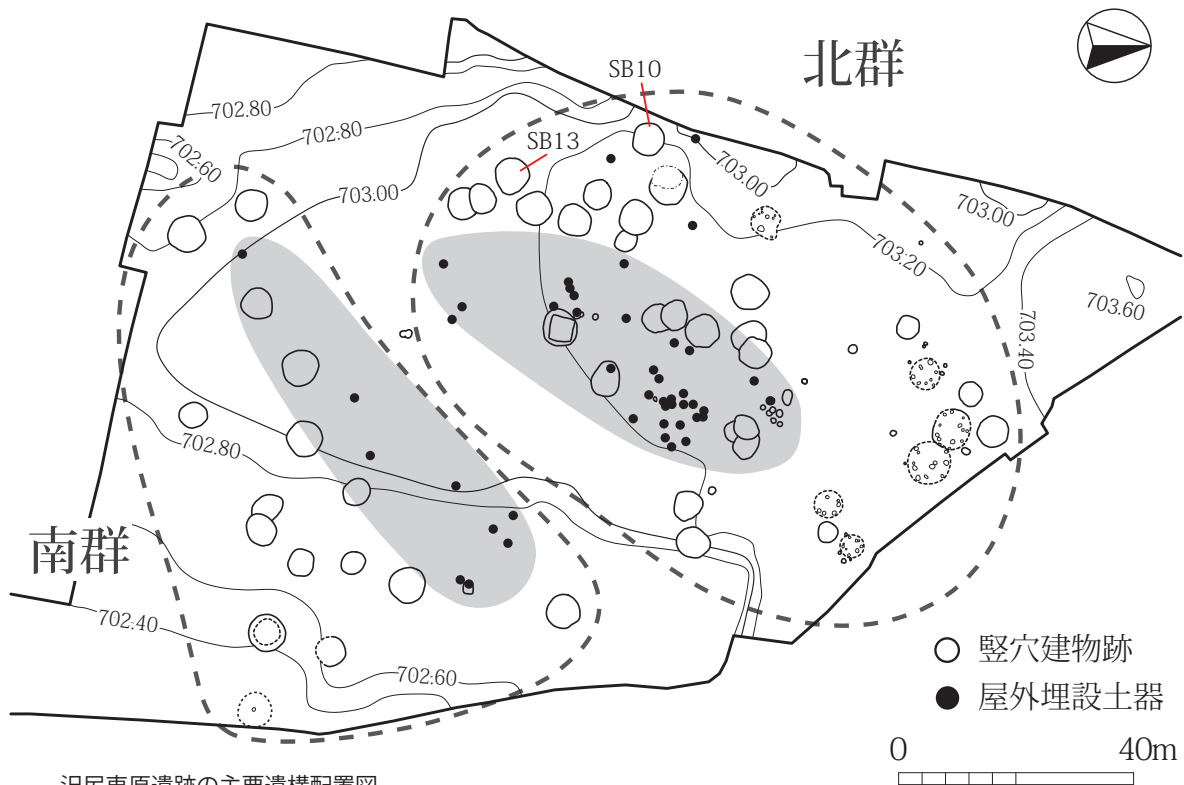
集落の構造をみると中央に広場と推測される遺構がない部分が存在し、その外周部に居住域が広がる。また遺構の分布状況から居住域が大きく北群と南群に分かれることも判明した。本集落の開始期は北群から始まるが、第4段階の新道式期以降は中央の広場を挟み南群が形成され、第8段階の曾利Ⅰ式期まで集落内で2つの集団が維持される。

本集落では居住域と広場（無遺構地帯）の境に広がる空間を中心に土器を原形のまま埋設する、もしくは土器を意図的に割り破片を一括埋納した事例を48基確認し、屋外埋設土器と総称した。土器は大型のものが多く、中小型のものも一定量含まれる。土器の中から骨片が出土する例があり、墓域として形成されたとも考えられる。さらに竪穴建物跡の中で略完形の土器が大量に出土する例も存在し、なかでも北群のSB10・13では、土器が大量に出土しただけでなく意図的な土器の切断例も存在し、廃屋墓の可能性が指摘されている。（高橋2007、寺内2021）。

本遺跡では集落のほぼ全体を調査できたためムラの変遷だけでなく居住域と墓域の関係も検討できる貴重な事例である。

参考文献 高橋龍三郎2007「関東地方中期の廃屋墓」『縄文時代の考古学』9 同成社  
寺内隆夫2021「縄文時代中期中葉における土器と竪穴建物跡の二次利用について」  
『長野県埋蔵文化財センター年報』37

(廣田和穂)



沢尻東原遺跡の主要遺構配置図  
トーンの範囲が屋外埋設土器群分布範囲



## 弥生時代のイネ・マメ・クリ!

飯田市 くろ だ だい みょう じん ぼら びー  
黒田大明神原 B 遺跡

当遺跡は、飯田市上郷黒田の土曾川<sup>どそ</sup>右岸に突き出た台地上に所在する集落跡である。道路等の開発に先駆け令和3～4（2021～2022）年度に発掘調査を実施し、令和5（2023）年度に整理作業を経て報告書を刊行した。本調査では約3,400㎡の範囲を記録保存し、縄文時代早期から弥生時代後期にかけての多くの成果が得られたが、注目すべきものとして、弥生時代の炭化種実を挙げたい。これらは複数のピットに土器片や炭化木片などとともに埋納されており、放射性炭素年代測定により、弥生時代後期後葉～末の値が示された。種別を同定したところ、イネ、マメ、クリの3種が確認された。マメは総数751個を数え、大半がアズキ亜属であり、ダイズ属が11個含まれる。イネは籾の状態で塊になっており個数は不明だが、総重量は78gを計る。一方、クリは3個と少ない。マメは状態のよい個体を計測した結果、佐久市の北一本柳遺跡・東大門先遺跡の事例と比較され、野生種より大型化した「栽培型」の特徴を有することがわかった。出土した炭化物に共通するのは、種実の状態を保ったまま炭化していたことである。したがって、調理に失敗して廃棄されたとは考えにくい。また、生のままでは土中で腐蝕して残らないことから、蒸し焼きなどの過程を経て形をとどめた可能性がある。では、弥生人たちは一体何のために貴重な穀類を食すことなく埋めてしまったのだろうか。推測の域を出ないが、当遺跡は低地の集落に比べて水田耕作に制約がある高位の台地上に位置することから、豊作の祈願など特別な儀式に用いられたのではないだろうか。いずれにせよ貴重な事例であり、さらに専門的な分析が行われることを期待する。

（飯田市教育委員会 春日宇光）



S P 357 炭化物





「信濃国埴科郡西條邑六工製茶場之図」長野県立歴史館蔵

# 信州の近代遺跡

## － 浅間火山観測所(湯の平)跡 －

浅間火山観測所(湯の平)跡は、明治44(1911)年に設置された我が国最初の火山観測所の跡地である。国内有数の活火山である浅間山の火口から西南西約2.3km地点、通称「湯の平」と呼ばれる場所に位置する。

噴火を前知し火山災害から住民等の生命財産を守るためには、常設の観測施設が必要であると考えた震災予防調査会幹事で東京帝国大学の森房吉博士が、長野測候所長の西澤順作測候技師とともに尽力し、長野県の予算により設置された。明治44年8月26日に地震計を据えて観測を開始したが、安全性などが考慮され、昭和4(1929)年には当施設での観測を中止している。

残された建物は同22(1947)年の浅間山噴火による火災のため焼失しているが、当時の姿は写真や絵葉書、設計図面などに残されており、これらをもとに復元することが可能である。

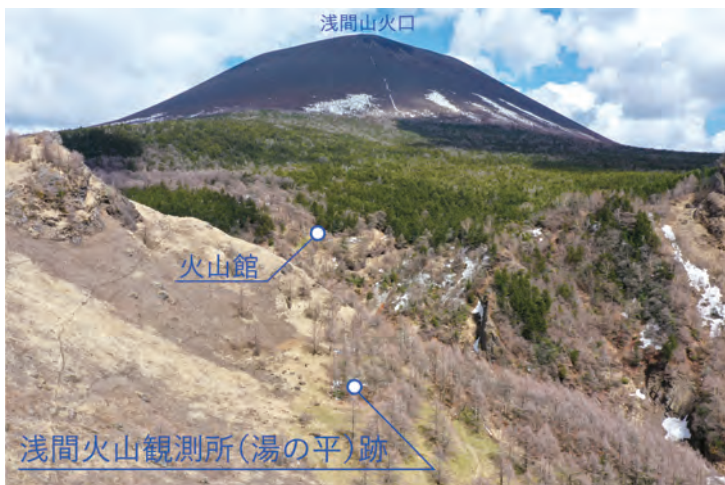
観測施設は木造平屋建ての建物で、当初の建築面積は約20坪ほどである。建物内にコンクリート製の地震計台を据えた観測室、事務所、宿直室が用意されていた。大正9(1920)年には西側に物置、押入、湯殿、便所が増設され、約30.5坪の施設になっている。また、建物前面には百葉箱を設置した観測露場がある。

建物敷地は造成地で、北東側斜面は切土し南西側斜面は盛土して、法面下端部分まで含め約578㎡の土台をつくりだしている。

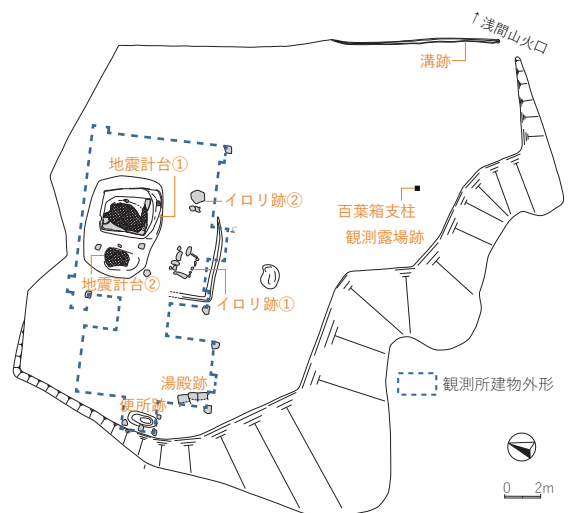
敷地自体は当時の形状をよく残していたものの、建物や工作物の痕跡は埋没し、地震計を据えた台が1基のみ目視できる状態であったが、令和5(2023)年10月に小諸市教育委員会が発掘調査を実施したところ、地震計台、建物礎石、便所跡、湯殿跡、イロリ跡、溝跡、百葉箱の柱が原位置に残存していることを確認した。この結果をもって小諸市は、令和6(2024)年5月21日に建物跡及び観測所敷地を市の史跡に指定している。

火山の常時観測を日本で初めて可能にした浅間火山観測所(湯の平)跡は、我が国における本格的な火山研究の始まりの地であり、また火山防災が始まった地である。(遺跡周辺は、現在立ち入り禁止です。)

(小諸市教育委員会 高橋陽一)



観測所の位置



浅間火山観測所(湯の平)跡平面図



## 北沢の大石棒

佐久穂町

北沢の大石棒は、佐久穂町大字高野町、上北沢の北沢川南岸標高750mに所在する日本一の石棒である。大正年間の北沢川の改修の際に横たわった状態で発見され、発見者により田の畔に建てられた。発見地の南側の丘陵上には佐久西小学校裏遺跡が、北沢川を挟んだ北側には北沢遺跡、東側には宮の本遺跡が所在するが、どの遺跡に帰属するかは不明である。縄文時代中期から後期が所産期と考えられている。石棒は佐久平東側で産出する溶結凝灰岩（志賀溶結凝灰岩類）の柱状節理を使用しており、発見地まで千曲川を渡河して運搬したものである。発見から今日まで百年間、屋外で風雨にさらされ、表面の劣化が進んできたため、屋内で安全に保管することとなり、レプリカを製作して発見地に建立することとなった。レプリカ製作は、同じ溶結凝灰岩を使用し、令和5年度に完了した。現地には令和6（2024）年11月、レプリカを建立する予定である。現在、佐久穂町生涯学習館「花の郷茂来館」において、11月の移動まで本物とレプリカを並べて展示している。保管にあたり再計測の結果、長さが225cm、最大胴回り88cm、重量330kgを測る。

（本物とレプリカの石棒を並べた展示はもう見ることはできないと思われますので、ぜひ足を運んで実見していただきたい。なお佐久穂町では、北沢の大石棒の保護と活用のため、広く寄附を募っております。寄付額に応じた返礼品も用意しました。ご賛同いただける方はご支援をお願いいたします。）

（佐久穂町教育委員会 羽毛田卓也）



発見地に建てられていた石棒（地上高180cm）



佐久穂町生涯学習館「花の郷茂来館」に展示中の石棒



もりしょうぐん つか  
**千曲市森將軍塚古墳館における「御墳印」について**

千曲市

国史跡森將軍塚古墳は、4世紀中頃に造られた長野県最大の前方後円墳である。昭和46（1971）年3月16日に国史跡に指定された後、昭和56（1981）年から11年かけて復原整備が行われ、平成4（1992）年から一般公開されている。

復原整備から30年以上経つが、古墳ファンの方々が全国各地から大勢訪れている一方で、一般の方々には森將軍塚古墳の認知度は必ずしも高いとは言えない。

例えば、森將軍塚古墳の名前は、「森地籍にある偉い人のお墓」という意味があるが、「森さんという偉い方がいたのか」とおっしゃる方々も大勢いる。

このような森將軍塚古墳に実際に足を運んでもらうにはどうしたらよいか、様々な模索をしていたところ、昨年9月に埼玉県行田市的一般社団法人行田おもてなし観光局から、国の特別史跡である埼玉古墳群を中心に「御墳印」を販売しているとの情報をいただいた。

このようなことから、森將軍塚古墳が単独で取り組むのではなく、全国に広がろうとする御墳印ネットワークに参画することで、全国の人々に向けて古墳への興味をもってもらいたいと考えた。

こうして、森將軍塚古墳の御墳印を作成することとし、価格300円にて販売することにした。御墳印は、長野県下では初めての試みとなる。

デザインには、森將軍塚古墳の特徴である「く」の字に曲がった特異な形が分かる等高線図と当古墳のシンボルでもある合子型埴輪を添えて古墳のなぞを伝えるようにした。

御墳印は、今年の春分の日から森將軍塚古墳館にて発売をはじめた。マスコミにも大きく取り上げられたことで、県内外から大勢の皆様にお越しいただくきっかけにもなっている。

（千曲市森將軍塚古墳館  
 中村彰男）



森將軍塚古墳



御墳印

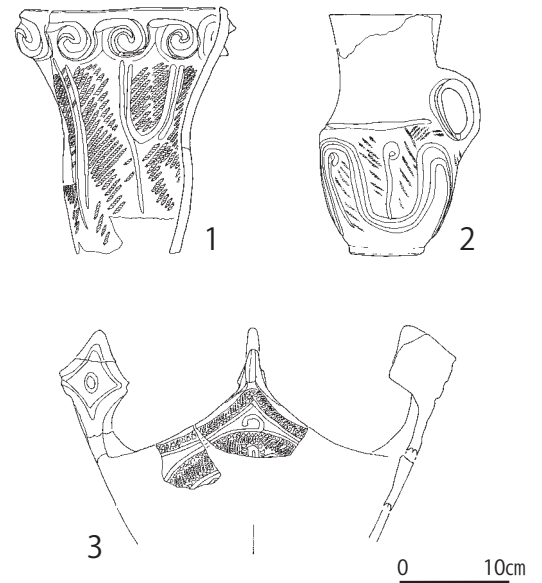
縄文時代を通じ、全国各地で時期区分・地域区分の単位となる土器型式は、様々な形と文様を有する類型やタイプと呼ばれるものから構成されている。それらには多数派・少数派があり、なかには非常に数が少ないものもある。卒論のころから40数年間に巡り合った、長野県に分布する希少な縄文中・後期土器とその背景を考えてみた。

中期後半の多連渦巻文土器は、口縁部に8単位以上の緩い渦巻文を描く小型の深鉢である。千曲市屋代遺跡群の地下4mに埋もれた集落跡から、破片を含めて24点が出土。ほかに県内東北信の8遺跡から14点、新潟県3遺跡5点、群馬県1遺跡2点、合計13遺跡45点があり、屋代遺跡群が53%を占める。集落の出現期に、大木9式を持つ東北の集団と、加曾利EⅢ式を持つ関東の集団が合議し、大木系に特徴的な大ぶりの突起を取り去って関東系の体部文様を描き、両者共通の口縁部渦巻文を残した、異系統集団融和の象徴として製作された土器か。

ジョッキ形土器は、1個の把手が付いた小型の壺形土器で、体部に加曾利E式の文様を描く。現在29遺跡35点を数え、長野県8遺跡10点、群馬県9遺跡12点、埼玉県7遺跡7点、東京都2遺跡3点、千葉・神奈川・愛知県各1遺跡1点である。縄文中期終末に近い1時期、加曾利EⅢ式が主体的な分布域の西半部から周辺に広がるころ、液体を注ぎ分ける儀礼を行う場で用いた器ではなかったか。長野・群馬県ではさらに希少な靴形土器に変化する。

後期中頃の1時期、口縁部に3単位の装飾突起を持ち、体部に列点で縁取った曲線文を描いた台付深鉢が東北地方一円に広がる。「華燭土器」と呼ばれるこの種の土器は、新潟県南半部ではほとんど見られないが、千曲川流域では10遺跡25点が確認された。飯綱町小野遺跡、長野市吉田古屋敷・吉田東町遺跡では複数個体が見られる。数百キロ隔たる遠隔地の特定の土器が集中する状況から、地域間或いは集落間の直接交流を推測できないか。

希少土器の広域分布には、通婚圏とは異なる社会的な背景が想定される。検証はこれからである。(綿田弘実)



1：多連渦巻文土器（千曲市屋代遺跡群）  
2：ジョッキ形土器（千曲市屋代遺跡群）  
3：「華燭土器」（飯綱町小野遺跡）

## 編集後記

本号では県内の北と南で縄文時代後期の敷石住居跡が発見されたことから縄文時代特集を組ませていただきました。また、昨年度刊行された報告書の中から縄文時代の集落跡全体を調査した事例や弥生時代の炭化種実など新たな発見がまとめられた報告書について紹介いただいたほか、信州の近代遺産では日本の火山防災の先駆的な施設である浅間火山観測所を取り上げました。

信州には魅力あふれる文化財が数多くありますが、そのなかでも県内外へ発信を行っている2遺跡の取り組みについて紹介しました。文化財に触れるきっかけになれば幸いです。

御多忙の中、寄稿していただいた皆様には感謝申し上げます。

(春日皓介)

(一財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4  
TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157  
<https://naganomaibun.or.jp/> 印刷：有限会社アツッーロ

本号で掲載した遺跡

